すると、たぬきの子は、またもやぼんやりした顔をして、きちんと床へ座ったまま、どうも分からないというように首を曲げて考えていましたが、しばらくたって「たぬき汁ですか。たぬき汁なんて僕知りません」と言いました。ゴーシュはその顔を見て思わず吹き出そうとしましたがまた無理に怖い顔をして、「では教えてやろう。たぬき汁というのはな、お前のようなたぬきをな、キャベツやニンジンと塩を混ぜて、くたくたと煮てオレさまの食うようにしたものだ。」と言いました。するとたぬきの子はまた不思議そうに「おかしいな。だって僕のお父さんがね、ゴ

ーシュさんはとてもいい人で、怖くないから行って習ってきなさいと言ったよ。」と言いました。そこでゴーシュもとうとう笑い出してしまいました。「お父さんは何を習ってこいと言ったんだ。俺は今とても忙しいんだよ。それに眠いんだよ。」それを聞くと、たぬきの子はにわかに勢いがついたように、一步前へ出ました。「ぼくは小太鼓の係りになったのさ。だからセロへあわせてもらって来いと言われたんだ」「どこにも小太鼓がないじゃないか。」「そら、これだよ。」たぬきの子は背中から棒きれを二本出しました。「それでどうするんだ。」「ではね、愉